

那珂川町図書館

オススメの1冊

『歯痛の文化史 古代エジプトからハリウッドまで』

ジェイムズ・ウィンブラント／著 忠平美幸／訳 【497.0 ウイ】

歯が痛い、そう感じたとき、みなさんはどうしますか？

私は、小さな痛みであれば、それまで以上に念入りの歯磨きをすることで様子を見ます。ただ、耐えることの出来ない激痛であれば、歯科医院で診察を受けるでしょう。現在、様々な技術が進歩し、歯科医療の世界でも、麻酔を使うことで治療中に生じる痛みを和らげることや、レントゲンで歯を撮ることで外から見えない部分まで見る事が可能になっています。しかし、これらの技術がなかった時代の人々は、虫歯などの歯痛に加え、治療中の痛みで、もっと辛い思いをしていたことが想像できます。

今回紹介するのは、そんな歯痛の歴史をテーマにした『歯痛の文化史 古代エジプトからハリウッドまで』という1冊です。砂糖などの甘いものをほとんど摂ることのなかった原始人は、めったなことでは虫歯にならなかったそうです。しかし、歯痛を始めとする口の中に関する病気は多かったようです。なぜなら、彼らの顎の筋肉が強かったことに加え、調理時にすり鉢の砂や土、塵が入り込むことで生じる食べ物のザラつきが原因で、「歯のすり減りすぎ」が起こったからだそうです。これにより、甘いものを摂ることだけが歯痛の原因ではないということが改めて分かります。

中世になると、歯痛患者がお金稼ぎの犠牲になることもありました。見世物の一つとして、歯のすることについてまったく勉強をしていない人が、人の歯を抜くという芸が行われていたのです。他にも、ある時代には、歯は魔術を使う時に重要な役割を果たしていたことや、歯の治療を床屋がしていたことなど、歯にまつわる多くの歴史が紹介されています。

このように、現在のように歯が痛くなれば歯科医院で治療できるようになるまでに、様々な歴史がありました。一見、難しい歴史本と思われそうなタイトルですが、読んでみるとユニークに歯痛の紹介がされています。表紙の、18世紀に描かれた歯痛患者の歯に糸を結び歯を引き抜こうとする男性(若干楽しそうに見える)の画が目印です。少しでも興味を持った方は、ぜひ1度手に取ってみてはいかがでしょうか。

那珂川町図書館(柴犬派)